

多摩美術大学美術学部芸術学科教授の家村珠代氏の家村ゼミでは、作家、学生、教員が共同し、展覧会をつくる際に生じる試行錯誤の過程を含め、展覧会そのものを再考することをテーマに活動している。

2017年からは毎年、学外からアーティストを招き、展覧会を開催。6回目となる今回は建築家の中村竜治氏を招き、「展示室を展示」を開催した。

家村氏の「展示室そのものを展示するような展示してほしい」という要望に対し中村氏が6案を出し、

そのうち3案「帯(形の観察)」「結界(風景の観察)」「対角線(大きさの観察)」を元に展示がつけられた。アートテークギャラリー1階、展示室の空間全体に、市販の白い紐を配置。会期を3つに分け、展示替えを行った。

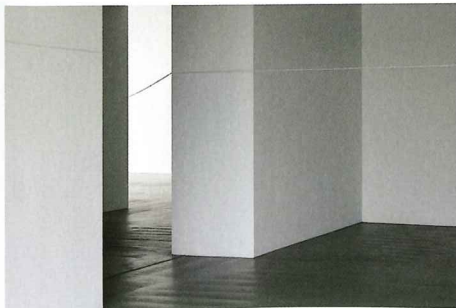
最初の「帯(形の観察)」では、躯体を跨いで張った約100mの1本の紐により空間にある柱やドア、壁やその角の存在を認識するというもの。

次の「結界(風景の観察)」では、ひと部屋ごと長さを変化させた紐を結界に見立てた。紐の向こう側は

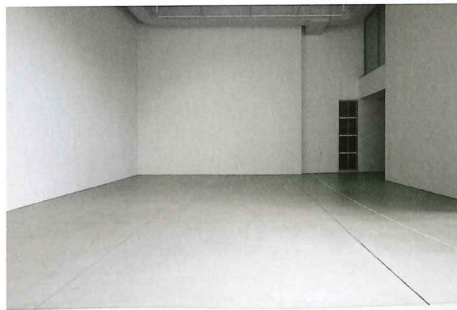
立ち入ることができないように感じられる。そこに人がいるとパフォーマンスのように見え、消火器等の設備もアート作品のように見える。

最後の「対角線(大きさの観察)」では大きさの異なる4つの展示室の対角を紐で繋ぐことで、空間のスケールを感じることができる。

これら3つの展示により、普段見落としてしまう空間を、目と身体で感じることができる。会期終了後にはゼミ生により、展覧会の過程と振り返りをまとめた書籍が作成される予定。



「帯(形の観察)」(9月28日～10月8日)。壁をつたう白い紐。



「結界(風景の観察)」(10月8日～15日)。20cmの高さに白い紐が張られている。



「対角線(大きさの観察)」(10月15日～19日)。自然光によって見え方が変化する。